

鎮疫祭

祭典日：2月13日

鎮疫祭（疫病を追放する祭り）は、火の儀式や神道のお祈り、仏教のお経の詠唱、伝統的な舞が含まれる大きなお祓いの儀式です。儀式の見所は、疫病退散を象徴して、随行者が大きな御幣を鳥居を越えて投げる、賑やかな「幣越神事」です。この祭りは宇佐神宮の末社のひとつである八坂神社で行われ、疫病、自然災害、その他の不幸を防ぐことを目的としています。鎮疫祭は、神職と僧侶の両方が関わる珍しいお祭の例で、宇佐神宮の神仏習合の長い歴史を反映しています。

鎮疫祭は、約千年前、宇佐神宮の僧侶が般若心経を夜通し唱える毎年の儀式として始まったと言われています。このため、今でも心経会（般若心経の儀式）と呼ばれることがあります。1868年に政府が神仏分離令を出した後、神道のお祭になり、それに伴って名前が変更されました。しかし、現在の形は、古い習慣に敬意を表して、僧侶による般若心経の読教が再び含まれています。

2月13日に、宇佐神宮の神職と真言宗の僧侶（主に大楽寺からの）が祓所という檀でお祓を行い、上宮（上の社）に進んでお祈りの儀式を行います。また、上宮から、白い服を着た随行者が長さ約3.5メートルの大きな聖なる御幣という棒も数本持っていきます。行列はそれから下宮（下の社）に向かい、そこでもう一つの祈りをしてから八坂神社に到着します。八坂神社では、外の鳥居の前にかがり火と臨時の舞台が設置されています。

宇佐神宮の宮司が正式な祈りを唱えた後、幣越神事が始まり、随行者が鳥居を越えて八坂神社の境内に大きな聖なる御幣という棒を投げようとします。鳥居を超えられる御幣があればそれは特に縁起が良いとされています。杖に付いている紙の飾りは、一年間、病気や災害から家庭を守ると信じられているので、多くの人々がそれを得るために急いでいます。最後の最も大きな御幣は、数人の随行者によって八坂神社に走って運ばれます。

幣越神事に続いて、この神社の正面の舞台で舞楽という宮廷舞踏の二つの舞が行われます。演舞は舞台の清めの儀式として行われる鉾を持った神聖な舞で、「陵王（陵の王子）」は6世紀の中国の勇敢な王子の物語を語る舞です。鎮疫祭の最後の儀式として、僧侶が般若心経を唱えます。すべての儀式が終わった後、神職は、鎮疫祭を見に来た人たちへ、お清めの火で焼いた餅を投げて配ります。